

# 国体岩盤沈下 ～地下抗・筑豊より

大島智広

国体岩盤沈下～地下抗・筑豊より

1\*



2



かつての産炭地である筑豊（写真 i）、かつての工業地帯である北九州（写真 ii）。筑豊という土地は廃坑後に人口が離れ過疎化が進み、写真 i の奥まった所にあるコンモリとした山をボタ山といい、ボタとは石炭の燃えない部分のことであり、燃える部分を黒いダイヤと言ひ、これを北九州まで運び産業の米である所の鉄の生産の熱源とし、この連携が日本の工業化の一翼を成したことがあった。筑豊は盆地であり写真のように九州には珍しく雪が積もることもある。

3



4



写真Ⅲは 1992 年（平成 4 年）に破綻した筑豊は赤池町のバス停付近の写真である。今は周辺自治体と合併し、背景の雲に隠れている福智山という山の名を取って福智町と改称している。民間のバス停留所は数か所しか無く、残りは廃線となり、高齢者の通院、買い出しのために行政が引き、継ぎ細々と交通インフラを保っている。図 4 は晴れた日の福智山であり、炭鉱の廃坑に伴って施行された通称・石炭六法によって、過酷な労働に耐えた旧・産炭地に対する恩給のような公金が廃坑後も流入しており、それが産業を失った土地を支えたが、2001 年、同法が失効し、過疎化に拍車が掛かり、地方の中にあっても、より都市との隔絶の度合いを深めている。

5

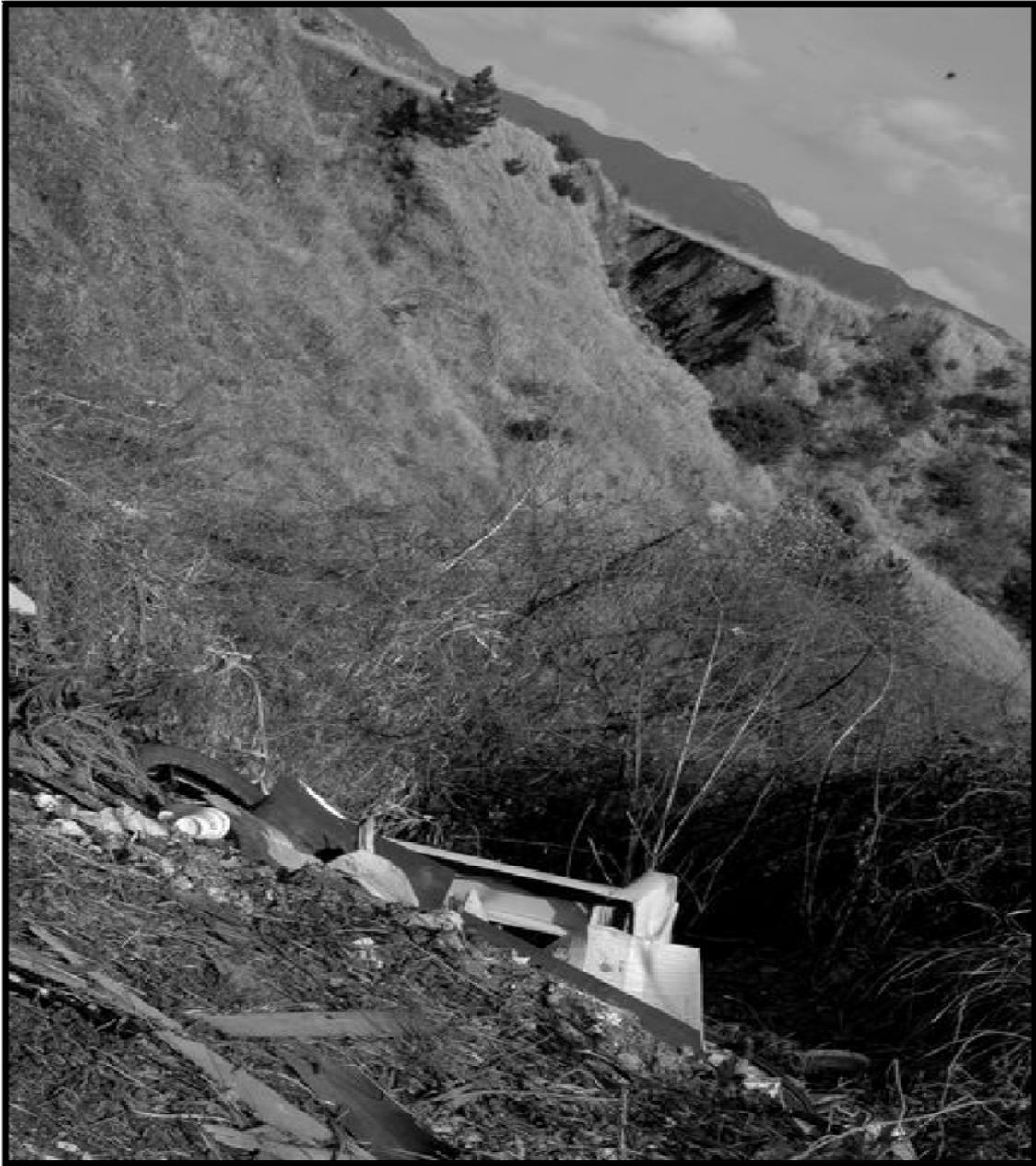
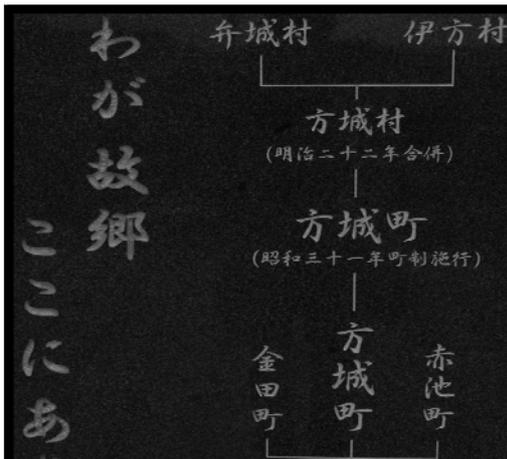


写真 5 はその旧・赤池町付近のボタ山の一つであり、ゴミ捨て場として置き去りにあっているように見える。過疎化とは何か、と言われて、それを一枚の写真で表現するならば、こういったゴミの散乱を、おおよそ芸術的とは言い難い写真となるのが自然と思われます。背景の頭の白い山が福智山であり、このボタ山の所在地は旧・金田町といひ前述の福智町の合併前の自治体名であり、破綻自治体を含む合併後の自治体にも、こういった景観を撤去する費用も気概も無く、この地方で新規開拓するとすれば老人ホームくらいであり、事実、このボタ山近辺にも真新しい施設があり、取り残されたモノを冷然と見守るのにも根気が必要で、写真などは花や犬猫を撮る物だと思われている方からは理解されないでしょうが、こういった風景は日和が良くとも何ら感興は湧き得ません。

6



7



8



9



10



その破綻した旧・赤池町と合併した自治体に隣町の方丈町という自治体があり、写真VIのような経過で合併が行われたのだが、この自治体の官舎（写真VIII）が改築されたのが写真VIIの記念碑にあるように平成10年とあり、その外観は写真IXで城の如くであり、旧・赤池町、つまりは隣町が破綻したのが平成4年であることを鑑みれば、隣町の財政破綻は対岸の火事に思えたのだろうか？支所となった現在では庁舎脇の職員用の駐車場が写真Xの様に空き地と化し、合理化の纏末を空しく現わしている。

11



12



13



そういった財政破綻地区を含む田川郡の中核都市を田川市といい、かつての石炭の繁栄を支えて殉職された方々の碑も静かに人気の無い場所で日を受けている(写真①)。

この碑を含む一角を石炭記念公園として整備し、行政は世界遺産への登録を申請しているが、行政の行う観光誘致策は失敗が多いのは全国津々浦々に枚挙にいとまの無い程であるが同市も例外とは思えない。(写真②)

が、そういった行政も過去の遺産も子供らは我関せず遊び場に、それだけが唯一の過疎地の活況のように映る。(写真③)

14



15



16



ただ、田川市中央の高台には広々とした公園が施設してあるのだが、同市の平均年齢が46歳であることも相まって利用者は乏しい。同市の交通インフラのハブであるバスセンター付近の商店街もかつての盛況は無く高齢者の遊歩道と化している。(写真15)

が、かつての炭鉱労働者の居住地である所の、通称・炭住には僅かながらに人が住み、淡々と生活に耐えている。

17



18



19



田川市の隣町に糸田町という自治体があり、ここも炭鉱の繁栄から遠ざかり、かつて、石炭を運んでいたレールは草蒸し（写真 17）、枕木やレールも撤去され、ただの草道と化している。（写真 18）

財政も悪化し、平成 3 年度に公債費負担適正化団体となり自治体の自治能力を問われる現状となりました。

そういった過疎化の中で同町の小学生の児童数は 10 年で 300 人減少したのだが、子供は我関せずで草道だろうが畦道だろうが遊び場にするのが、素直に喜べないのも仕方が無いようです。

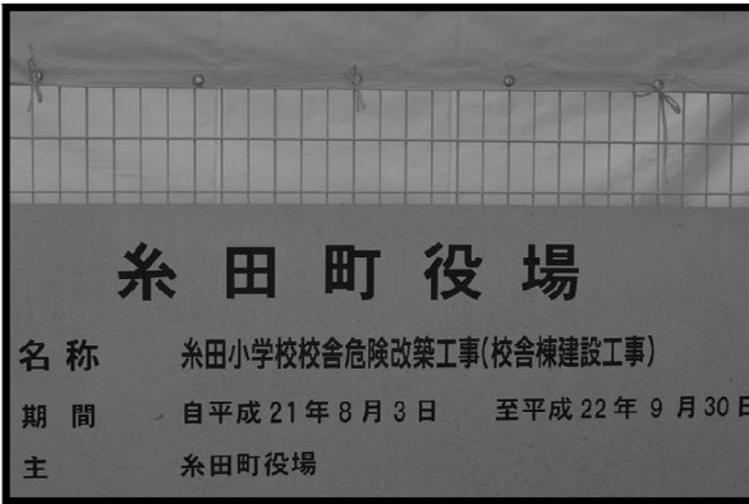
20



現役世代の人口が同町の人口の4割を切り、人口の4人に1人が高齢者になったが、単線に一両編成の列車も細々と資金難ながらも運営されている（写真20）。

そんな中であって、小学校の校舎の老朽化に伴う改築工事が行われ、その財源を町単体の財政で賄える見込みは薄く、県、国への依存度は年々、増し将来負担は増加の一途である。が、そういった現実を認識するには小学生は幼く、校庭では背後にクレーンが動く中でも我関せず、子供たちは遊び続ける。これは、もはや冗談にも成りえず時代錯誤の概念の域を超えているように見受ける事が出来る（写真21、写真22）。

21



22



23



筑豊 発車時刻表

前記取・栴安方面		時	田川・篠斗方面	
54	8			
48	6		32	
15	32	7	04	52
25	58	8		45
	22	7	12	39
	22	11	02	
	23	15	07	
	21	12	03	
	21	12	03	
21		14	03	
21		15	03	
22	43	16	03	
19	53	17	03	36
21	52	18	09	38
21	50	19	09	38
24		20	07	41
27		21	12	44
08		22	26	53
		23		

24

25



そういった旧産炭地ではJRであっても電化していない在来線もあり（写真23）、本数も減少し続けている。（写真24）。その筑豊内の駅近くに前政権の首相の出身母体である財閥所有のコンクリの山があり（写真25、写真26）、年々目減りしている建設業の影響は避けがたく、コンクリ需要の落ち込みは顕著であり、炭鉱閉山後の、最後の筑豊の収入源であったことも鑑みれば、この時流から筑豊という土地はさらに取り残される可能性が増している。

26



27



28



そういった筑豊という土地と福岡県内で最も繁華な都市である福岡市を結ぶ幹線道路も近年、開通し、過疎化が進んだ土地の人、モノ、カネを都市部に逆流させているわけだが、そういった事例は、全国津々浦々に散見できたにも関わらず、首相在任時中も、政権交代前の選挙期間中も、幹線道路は整備され続けたのだが、そんな事は地方のことと誰にも取り合われずに看過されました。が、この幹線道路の財源が地方の零細自治体単体の予算で賄えるはずが無いことを鑑みれば、国庫負担で造成されたことは、日本国民であれば誰でも想像できることであり、当然、都市部を含めた納税者の公金の行方が、こういった末端地方に注ぎ込まれていることを、知る機会すら持てずに着々と公然に施行される国家が日本国であります。こんなものは公然公金横領罪だ。



同じ筑豊内に筆者の通ったキリスト教系の幼稚園があったのですが、ここも少子高齢化の波に耐えきれずに閉園し、地元のクリスチャンの方の要望で残された庭先の聖母子像と礼拝堂を残して別棟は撤去され、閑散としてしまいました。この旧・幼稚園近くにアーケードの商店街があるのですが、大型郊外店の出店に伴いシャッター通り化し、商店街が数十年のローンで建設したアーケードを返済する当ても無く、人通りも無く、これも公金で埋め合わせる可能性がありますが、そんな事を知る機会も、都市部の人間には無く、淡々と写真の雪のように公金による埋め合わせが地方では行われており、国庫を蝕み国家・国民の将来を蝕んでいるのですが、過疎地の聖母子像に祈っても、財政の悪化は歯止めが掛からない様子で、この負担はマリア様が抱いてるような赤子にも無用意に引き継がれるようです。



□□□□□□

「近々の記事抜粋」

○福岡県・町村会から現金約100万円をだまし取ったとして詐欺罪で起訴された同会参事、天野敏哉被告(49)らが、詐取した金を中島孝之副知事(67)らの接待に使ったとされる疑惑で、麻生渡知事は19日夜、緊急の記者会見を開き、中島副知事から辞意を伝えられたことを明らかにした。麻生知事によると、辞任理由について中島副知事は「県政に対して信頼が損なわれ、責任を感じている。副知事の職務にも支障が出ている」としているという。中島副知事はこれまでの取材に対し「(天野被告らと)面識はあるが、接待を受けたことはない」と説明。しかし、疑惑が浮上した後の18日は体調不良を理由に登庁していなかった。中島副知事は昭和39年に入庁。商工部長などを歴任し平成11年から副知事を務めている。今回の事件をめぐる県警は、中島副知事が天野被告らと福岡市の繁華街・中洲にある高級クラブで同席していたことを示す店側の帳簿や台帳を押収。関係者によると、飲食代を県・町村会名義で後払いにしていたことが読み取れるという。店側が飲食代の金額とともに来店者の名も記録しており、副知事のほかに県の課長の名前も記されていたという。福岡県町村会による贈収賄事件で、贈賄罪で起訴された全国・町村会長で福岡県・町村会長の福岡県田川郡・添田町・山本文男被告(84)が3日、県町村会長職務代理者の山本康太郎副会長(小竹町長)に、会長職を辞任する意向を伝えたことが、関係者への取材でわかった。県町村会長を辞めれば、自動的に全国町村会長も辞任することになるが、町長職にはとどまるとみられる。

○地域振興に刑務所誘致を計画 PFI方式 旧産炭地の福岡県田川郡・大任町 給食や清掃、警備などの業務を民間が担う。

(注)下線が引いてある自治体は筑豊圏内の自治体です。

国、県からの補助金、仕事を取るために癒着が横行しているのは記事を並べればすぐに分かり、公金の流入が期待できない場合は刑務所を誘致してでも補助金と仕事を作るという傾向が困窮した地方の実態であります。

さらに加えて申し上げれば、現在の福岡県知事の麻生渡氏が県知事会の首長を務められて地方分権を推進していたことを鑑みれば、こういった不祥事によって地方に分配されるはずであった予算分割が頓挫し、例えば、その予算を使えたとしたら、現在、都市と地方の教育格差が言われている中、第二の就職氷河期が言われている中であって、非正規雇用率の上昇した教職員を正規職員として新規に雇うことも可能であったわけで、この頓挫が地方にどういったデメリットを加えているかを御理解して頂きたい。結果、ますます都市と地方の教育格差が広がり塾や予備校等の民間の教育機関が台頭し公教育との格差に拍車を掛ける可能性をも危惧いたします。つまりは国民の将来の資質及び可能性をも懸念せられるのが断腸の遺憾であります。

前述した小学校校舎建て替えの工事を行っている自治体の給与費に関して叙述しますが、自治体には国県から補助金の支給を受けている依存財源（地方交付税や国庫支出金等）とその自治体単体で調達できる財源を自主財源といいます。両者、合わせたものを自治体の予算とします。

○自主財源＝（地方税＋分担金及び負担金＋使用料＋手数料＋財産収入＋寄付金＋繰入金＋繰越金）としますと、

平成12年人件費(1140947)÷平成12自主財源(＝493926＋92714＋146900＋42555＋97922＋10000＋230969＋220306＝1335292)≒85%

平成16年度人件費(994141)÷平成16自主財源(＝471421＋73246＋153057＋40663＋32853＋1500＋14154＋404945＝1191839)≒83%

となり数カ年に渡り自主財源の内の八割を職員の人件費に割いております。

○地方公務員法第十四条（情勢適応の原則）

地方公共団体は、この法律に基づいて定められた給与、勤務時間、その他の勤務条件が社会一般の情勢に適応するように、随時、適当な措置を講じなければならない

という箇所があり、社会一般の情勢を鑑みるならば公務員の給与、勤務時間の見直しを既に行ってなければならぬのですが、現況は変わりません。

加えて、公的社会保障が揺らぐ中にあっても共済基金だけが異様な堅固さで財政で担保されていることが、市民側から見れば違和感があり、それを民間側の社会保障の財源に分配するのが、富の再分配の国家統治の原則に従っているように思われますが、そんな事例が上がらないのが官民の意識差に既に表れているように思われますが、これを明文化し官民一致の認識にすることで、官民平等の社会保障が得られれば、あまねく万民の生活の安定に繋がるように思われますが、そして、それが国家首脳以下の公僕の成すべき友愛精神のように思われるのですが、現実の日本社会は新聞の社会欄を見る必要も無く友愛精神が失われ、美しい国家から掛け離れ、国家・国民の品格が疑われるような格差社会に成りつつあるのですが、ここで、唯一つ言えることは、都市と地方に格差が厳然とあるのなら、地方の方が公金に依存している度合いが高いだけに、国家に対する意見は切実であり、死活問題に直結しており、これを、ないがしろにされれば、津々浦々の地方市民の怨嗟は団結し行動し交渉される段にまで至るハズであり、その象徴が沖縄市民に表れていることを、そしてそれが他の地方民と一を成す可能性があることを官民一致で認識すべきである。でなければ中央中枢の離散に歯止めが掛からない事を危惧いたします。



上の写真は20前半でソパー杯で東京の地下を撮って回っていた時の写真です。座りこんだスーツホームレス。この時期は余りに食えないので、目がギョロついて昼間、新宿をサングラス無しで歩けなかった。しょっつちゅう極道っぽい人間に寄って来られた。で、余りに食えないので実家のある福岡に呼び戻され、悶々としておりましたが、今は情報の公開義務でネットで故郷周辺の財政状況、各種統計が読めるので、再び、火が付き、写真機を以て旧・産炭地及び旧・工業地帯を歩きまわりました。麻生太郎氏が首相戦に出馬する時期くらいに、ガラス屋さんのオバアチャンと話しました。お話を聴いていると、炭鉱夫のゴーグルのガラス部分の加工を手仕事でやるのを生業としていた時期もあり、炭鉱の再生期には子供をおんぶした状態で手仕事を夜中までやっていたそうです。その方に「消費税の引き上げの議論が盛んですけど、それやったら小売店は死ぬ思いをしようと思うんですが、その辺りは、麻生さんには分かりますかね？」と伺うと、クスッと方頬を歪めて、「あの人は一円の金に泣いたことがない。」とのことでした。

北九州のホームレス支援のNPOの炊き出しに参加した時のことでした。二月の頃で、弁護士の方も来られて無料の法律相談も受け付けるとのことでした。それで、私が、ホームレスの方々に相談ブースが「空いてますよ。」「気軽にどうぞ。」と肩を抱いて言って回ったのですが、硬直した顔で拒絶される方が多かったです。それで、古株のNPOのスタッフさんにその疑問を伺うと、「前に四年間、口を聴いてくれなかった人がおられました。その方は四年の期間を掛けてようやく、財布から免許証や身分証を出して自分の話をし始めました。」とのことでした。

しかし、中には「行ってみる。」とその場で意志を固めて、相談ブースまでご案内した方がおられたのですが、私が他の用に当たっている時に不用意に後ろから肩を叩かれ「ありがとう。相談して良かった。冬の寒さをどう乗り切ろうかと心配しとったんよ。前は、新日鉄に型枠の職人で非正規で入ったけど、仕事が減って高炉を一つ閉鎖してね。ステンレスの生産が全盛期の三分の一よ。お兄さん、ホントにありがとう。」



最後に、数年前に福岡県・北九州市で「生活困窮者は死ねということか。」「おにぎりが食べたい。」と書き遺して、保護費を打ち切られて餓死された方がおられました。その方の最後の住居の番地を見ますと“小倉北区”とありましたので、小倉北区で一番古い霊苑の無縁仏の蔵と慰霊碑を見に行き、おにぎりを置いて参りました。現代は情報が氾濫し、冷笑と無関心、移り気と忘却が横行しているようですが、そう社会傾向をそのままにしていると、高齢者が多く、公金依存度の高い自治体の人間の多くが、似たような死に方をせねばならなくなってしまう危険性があり、財政悪化と非正規雇用の増大の連鎖が多く国民の老後を危険に晒しており、看過するにも高齢化率の上昇は留まる事は無く北九州が政令指令都市の中で最も高齢化が進んだ土地であることを鑑みれば、もはや説明不要である。筆者は炭鉱夫の孫であり筑豊は戦後最大の労働ストが起きた土地でもあります。万民の辛苦は通底し得ると思われまふ。大同団結。応答リンク願いたい。



国体岩盤沈下～地下抗・筑豊より

大島智広

2010年6月15日第1版発行

© Tomohiro Oshima 2010 kumo125[a]yahoo.co.jp [a]を@に変換してください

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市中央区学園町1-1 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 大島智広

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN なし